

PRACTICAL ENGLISH 管見

木名瀬 信也

1. はじめに——

短期大学設置基準は、第一章の趣旨の項に、「実際の専門職業に重きを置く大学教育を施し」と言い、さらに「職業に必須な専門教育を授ける完成教育機関であり」と続けている。職業専門教育が短期大学に於ける第一の目的ならば、英語英文科はこれをcurriculumの中でどのように具現しているのか、そして専門科目としての英語はどのように把らえるべきであるのか。短期大学英語英文科における practical English を中心に考えて見たい。私自身の周囲から考究の対象をとりあげる場合、これに関わりのある特定個人を特に批判の対象としているのではないことを、先にお断りしておかねばならない。

2. 実用英語と教養英語——

短期大学設置基準はまた、「良き社会人を育成すること」を目的とすると唱い、「一般教育との密接な関連において、……同時に大学教育の普及と成人教育の充実を旨とする新しい使命をもつ」とその方向を明確に示している。設置基準の趣旨に盛り込まれた内容は、二つに大別され、英語英文科においては、実用英語と教養英語とにそれぞれ対応すると考えられる。もちろん一般教育の中に含まれる外国語科目としての英語は、対象の範囲外とし本論においては触れないこととする。大学における英語教材ないし教育内容を、このように実用英語と教養英語とに分けることについては、当然のことながら問題があるが、一般的に受入れられているものとして論を進めることにする。

教養英語は文学英語と同一視されることもあり、英文学の鑑賞や研究に関わりを多くもち、実用英語は非文学的科目や教材を取り扱う際に研究

対象となることが多い。さらに角度を変えてみると、教課、教材を思想、感情などの内容面に焦点を合せると、教養英語的側面が表面に現れ、英語の用法・文法などその形式面にスポットを当てると、実用英語的側面が浮び上って来ることが多い。旧制大学および四年制大学の英文科においては、大学英语即教養英語であると考えられるので、この視点に立つと、教養英語の輪郭はかなり鮮明になってくる。しかし実用英語が英文科に顔を現わすのは、短期大学においてであり、例外的には Journalism を専攻する部科においてであろう。大学の curriculum の中に実用英語が確たる地歩を占めるには、多くの障害を乗り越えねばならず、長い時間と地道な考究とが必要であろう。

3. 実用英語と実務英語——

Practical English に実用英語の訳語を与えている主な英和辞典は、三省堂 College Crown、岩波英和大辞典、研究社英和中辞典などであるが、講談社英和辞典は以上の外に実用と実務との二つを practical の訳語として挙げている。実用とは何を意味するのか、さらに実用英語とは何か、実務英語との相異は何か。定義も不明確であり甚だ不安定である。この問題に真向うから取り組んだのは、大修館「実用英語ハンドブック」である。この序章において、実用英語の定義の困難を先ず述べ、文学英語との対比において ornamental English は別としても、文学英語を emotional, imaginative なものと限定することの不適切さを言い、factual であることは実用英語の独占物ではないことをも指摘している。また新聞英語を実用英語の代表の一つとして具体的に挙げ、Current English に焦点を当てながらも、journalese や business jargon のように特殊化が極度になると、実用性の面から考えて Practical English の枠を越えるものとする。さらに実用英語の性格を、「衣食住に関する特殊語義」「現実とのかみ合い」「実生活の文脈」「専門語使用の利害」などの項に分け、具体的に確認すべく努力が払

われているが、結果は未だ十分読者に理解を与えるほどに至っていないと思われる。「実用英語ハンドブック」の序章は「実用英語への道」と題して、第5項にBusiness English を採り上げている。これがこのハンドブックの眼目であり、従前の説明は足掛りであるとも考えられる。実用とは日常生活の中で最も関心の高い経済生活に関連するものとし、Business English を全面的にexclusively に記載の対象としているからである。

Business English はCommercial English と同一か、またはさらにTechnical English の一部をも含んで、Occupational English の一分野を占めるものと考えられるが、訳語には実務英語・商業英語などが当てられている。上述の説明からBusiness English は実用英語即ちPractical English の一部であり、Business English を実務英語とすれば、実務英語は実用英語の特定の一分野を受けもつことになる。

4. 実用英語と Practical English —

日本の代表的英和辞典がPractical English に実用英語の訳語を与えているのは前章に述べた通りである。しかし筆者の狭い読書範囲には、Practical English を然るべき native speaker の用例の中で見出したことがない。斉藤秀三郎の Practical English Grammar は Practical + English Grammar であり、Practical English Usage や Practical English Conversation も同類である。こゝで注意すべきは、前述の「実用英語ハンドブック」がPractical English Handbook の英文タイトルをもち、さらに初版においては A Handbook of Practical English のタイトルをつけていたことである。できることならば、A Practical Handbook of Business English にして欲しかったと思う。類似の例を拾ってみると、A practical acquaintance with a language (*Webster's 3rd New International Dic.*) や a practical knowledge of English (*Shogakukan Random House Dic.*) などがある。

日本独自の知的環境を、日本的に表現することに反対するなど言うつもりはない、日本製英語が幾つも英語国に逆輸入されているからである。しかし Practical English は、いわゆる実用英語——この表現も不明確ではあるが、——の外に上記「実用英語ハンドブック」で触れているように正則英語を指す場合もあるのである。斉藤秀三郎の *Practical English Grammar* (1898) の発行された翌年 Henry Sweet の *The Practical Study of Language* が上梓されている。English を speech として把え、学習法および教授法と関連して practical でなくてはならぬと考える。これを具体的に言うと；

A good method must be based on a thorough knowledge of the science of language—phonetics, sound-notation, the grammatical structure of a variety of representative languages, and linguistic problems generally. (p. 3)

(すぐれた方法とは一般的に言って、言語科学すなわち、音声学、音声記号法、種々な代表的言語のもつ文法上の構造、その他言語上の諸問題などについて、十分な知識を基礎にもっていなければならない。)

英語の音声的側面にもっと注意を払い、話し言葉としての言語現象を対象として、研究すべきことを説いている。正則英語の唱道も同工異曲であろう。これは現在、英語教授法で言われている「聞き方」「話し方」「読み方」「書き方」を総合的に研究対象とすること、特に従来の「読み方」「書き方」偏重傾向に対し補完的に前二者に注意を集中する現在の状況に継続し発展を見ていると言えるであろう。このように考えて来ると実用英語とは、特殊英語 (special English) ではなくて、英語学習の standard として位置づけられている一般的な基礎英語であるとも言える。

日本英語検定協会で行なう「実用英語検定試験」はこのような「実用英語」を対象としている。日本英語教育協会発行の「実用英語ABC」はこの検定試験の準備用であるが、subtitle は *The ABC's of Practical English* であり、実用英語に practical English の訳語を与えている。

実用英語の意味が上述の通り一定していないにも拘らず、practical English を便宜的に訳語としているため、不明確さが倍加したと言える。practical English を日本独自の用法として定義づけ、実用英語に対する専門用語なりと位置づけるに至っていないからである。

5. Practicality—

Practical English において practical が adjective の restrictive use として用いられるとすれば impractical English とはいかなるものか、practical の antonym を例挙すれば、theoretical, speculative, ideal, formal, imaginative, useless などであり、この中では imaginative = literary のみが English の epithet として使用可能であろう。所謂文学英語は常識的な対応語として本稿の第2章で簡単に触れた。Practical を non-restrictive use として見ると practical = useful と考えられるが、こゝに日本人の英語に対する態度を見ることができると言えよう。私なりに useful English の基盤を探ってみれば、

The English……being a practical people, it is possible that they might have achieved their object. (OED) のように practical people として英国人が日本人にも理解され、明治初期の英語は当時大英帝国の国語であることの認識にたつて、practical な目的や用途の裏付けをもっていた。英語は即 practical language であり non-restrictive epithet として practical English が日本人に用いられるようになったのではないか。太平洋戦争終結の直後にも同様な英語熱が吹き荒れたことは衆知の事実である。従って米英人にとっては practical English が奇妙に響き、non-restrictive な意味では nonsense と感じ、restrictive な用法として literary English に対置する意味でのみ、彼等は理解し得るのであろう。我々が「有益な日本語」という表現を耳にした場合を考えて見れば、このことがさらに明瞭になる。Restrictive epithet として pra-

cticalが用いられた例に、practical arithmetic, practical chemistryがあるが、それぞれ実用算数・応用化学として定義が確定している。日本の発展の特定時期に英語万能が信奉され、これが英語は役に立つものなり、としてnon-restrictiveな意味でpractical Englishの発生を見たと考えられる。従ってpractical Englishはまことに日本的発想に基づくと言えるであろう。

明治初期に実用主義を日本にひろめたのは申すまでもなく、福沢諭吉であるが、これは功利主義と訳出されたutilitarianismに他ならない。Practicalであるのは能率的に経済的利益に結びつくことであった、utilitarianismの一側面を強調しすぎた感はあるが、論理的には当然同一線上の観念である。産業の発展と経済の伸長はこのために一層促進され、現在の日本の経済的繁栄に何等かの形で、大きな影響を与えている。しかし practicality に対する信奉はその行き過ぎもありmorality やhumanity への考慮から当然反撃を受けねばならなかった。伝統的な士農工商の階級意識の残滓が、キリスト教的な新しい精神主義と混合して、実用主義に立ち向った。英語は実用主義に沿い経済的発展を約束し、効果を挙げる原動力の一つであったが、この英語が同時に新思想、新文化を導入し、日本人を西欧社会になじませることになった。大学においては当然のことながら、後者の英語が追求され、思想内容を性急に理解せんとした結果が、教養英語、時には所謂変則英語の出現を招くことになった。教養英語もやはり定義が不明確であるが、これは次第に学校英語として定着したといえるであろう。

Practical Englishにおけるpracticalの意味は上述のようにrestrictiveであれnon-restrictiveであれ、十分こなれていないのであるが、さらにこれを複雑化する要素として、practicalが方法論に深い関わりをもって用いられたということである。Henry Sweetの*The Practical Study*…然り、Saito's *Practical English Grammar*も同類である。英語の教授法や学習法にpracticalは一層よく密着しているからである。

6. Curriculum 中の Practical English

Practical English は何かという impractical な問題に深入りせざるを得なくなった理由は、わが英語英文科の curriculum の中に実務英語をもっているからであり、実務英語の定義を明確にするため、直接関係ありと思われる実用英語、さらに双方と相関的に用いられる practical English を検討しようとしたのである。

巷間「学校英語は役に立たぬ」「役に立つ英語を教えろ」との声を聞く。こゝで「役に立つ」は practical と関わりをもつことになるが、この意味では前述の正則英語、音声面にもっと注意を払う英語、会話を中心とした英語が脚光を浴びることになる。しかしこれは正しい英語教授法においては、「聞き方」「話し方」にもっと力を入れて、「読み方」「書き方」偏重を排せよとの意見が唱道されて既に久しく、これに沿った努力も積み上げられている。ただ未だ実効が期待される程上がっていないと言うのが実状であろう。役に立たないという批判者側から、教材が文学的作品に傾き過ぎるとの意見がある。しかしこれは大学の文学部以外の部科において言われる時には、相当の理由があるに違いないが、こゝでは短大の英語英文科を中心に話を進めているので、この批判は別途考究の対象とすることにする。むしろ短大英文科においては、世俗的見解の一部に短大＝花嫁学校があり、茶道・生け花の同類の中に入れられる教養英語が問題であろう。英文学的知識はもっていても、英語の読解力・発表力が弱く、翻訳で読んだ作品について日本語で論文発表を行なっている例を見聞する。この問題に関しては、さらに英語教育とは何かを問わねばなるまい、それは技能教育なのか、人間教育なのか、冒頭に記述した短期大学設置基準から文言を検討すれば、上記の双方を同時に目的としなければならない。翻訳による作品の鑑賞や批評は、それが日本語の翻訳ならば日本語の作品の鑑賞ではあっても、英語とは直接の関係がないと言わなければならない。英米文学作品は英語で表現されたものであり、英語を通じてでなければ鑑賞も批評もできるはずが

ない。この際文学作品と言うと literary English を連想し、practical English と対置して考えるのは、余りにも形式的であり、「実用英語ハンドブック」も指摘している通り、literary English から音声要素を排除して言えば文学はそのessence を失うことになる。変則英語が行なわれていた時代には、文学作品の鑑賞も不十分であったと言うべきである。英語英文科における教養英語とは、学習者が英語という媒体を通じて文学作品等を理解し、その背景にある社会の文化的様相を知り、その中で生活する人間の姿を見て、人間を含む社会の価値体系を学習者自身が樹立するのに役立つねばならない。さらに英語は文化を伝える媒体であると同時に、文化そのものであるという側面をもっている。

短大における教養英語をこのようにして見てくると、実用英語の一面である正則英語をも当然包含することになって来る。英語そのものが文化であり、言葉の形と意味とを深く考究して行けば、人間の営みそのものに哲学的に触れて来ざるを得ない。教養英語は形式的な茶道や生け花と同一視されるべきではない。もちろん花嫁学校・茶道・生け花もそれぞれその理想像をもっているはずであり、こゝではその理想像を対象にするのではなく、く、世俗的な意味で採り上げているのである。教養英語も本来のapproach には「聞き方」「話し方」「読み方」「書き方」が何れも必要であり、この点では実用英語との差は殆どないに等しい。本稿の始めには、実用英語と教養英語との差異に注目したが、あるべき姿を追求している間にその差異は狭まって来たように思われる。しかし差異の埋め切れない側面もある。

Business English としての実用英語（実務英語）が一つ、さらに前にも触れているように、教養英語の内容重視と、実用英語の形式尊重との隔たりである。Business English は英語一般の知識の他に、business の知識をも必要とする。しかもbusiness の範囲は広汎でその種類は多岐にわたり、各分野に細分化すると、それぞれspecial English として独立するが、special English の種類は数え切れない。代表的なものとして質

易を中心としたcommercial English が登場することになる。たびたび引用した「実用ハンドブック」が結局実用英語の標題のもとにbusiness (commercial) English を記述することになったのも、故のないことではない。

次に思想感情の理解鑑賞を中心とする教養英語に対して、言語型式 (sentence pattern と一般に呼称されているものを含む) に注意を集中する実用英語は、わが短大に於てそれぞれ「英文演習」「英語演習」の名称で単位を分っている。当を得たものと言うべきであろう。

実用英語を技能教育と人間教育との面から考えて見ると、多分に前者との関わり合いが大きいと思われる。ピアノのlesson やスポーツのtraining タイプタイターや珠算のdrill など、いずれも技能教育に不可欠のものであり、繰り返しを続けることにより、身体で会得することを目標とするが、これがpracticeというものである。英語教授法の中にpractice は不可欠要素として採り上げられるのは当然のことであり、それ故に英語は技能教育の見地からも考えられる。practical English はここでもまた、教授法という方法論との関わり合いをもつのである。Lesson, training, drill などのpractice は技能習熟と結び付いているのは上記の通りであるが、それは同時に教育でもあることを忘れてはなるまい。技能の修得に加えて根気や柔軟な適応性などが、涵養されることを知るべきである。Henry Sweet も mind-training の具としての語学学習を認めている。教育は人間を対象に行なわれるのであるから、人間教育の面を含んでいるのは当然である。人間教育という場合、知育よりも徳育に焦点が合せられるが、英語教育の中に於ては、技能教育と人間教育の両者が併行して実践される。さらに言えば技能修得の過程において人間教育が実践可能である。Practical Englishはこのような視点に立つと、curriculumの専門教課すべてが、practical English になってしまう。わが短大英語英文科のcurriculum がもつ「実務英語」はこの点を考慮に入れて、business English またはspecial English として取り扱うべきであろう。そしてspe-

cial English の範囲を「実用英語ハンドブック」が示すように、「衣食住に関する特殊語義」「現実とのかみ合い」「実生活の文脈」などを考慮に入れ決定すればよいのではなかろうか。

7. おわりに——

実用主義が経済の伸長に貢献したことは間違いなく、この道に沿って成功した人を実業家と呼んでいる。戦前フランス文学の泰斗で、名随筆家とも言われた故辰野隆博士の言葉に「われは虚業の徒なり」があったことを記憶している。実業人に対する皮肉と学問に対する謙虚さが同時に伺われる言葉である。実業人には金銭で表現される現世的な欲望を追求するだけで、人間の精神的側面を等閑視する者が多く、実用英語ないし practical English はそのような目的追求に役立つ道具立ての一つのような印象を人に与えがちである。短大が職業専門教育の中に実用英語を登場させれば、どうしてもこの側面にのみ光が当たってしまう。英語教育には職業専門教育の線に沿った、技能としての英語修得と、技能修得過程における習練の教育的効果と、英語の背景にある文化社会的知識による国際的理解、さらには全人類的把握があることを考え、practical English を大きな perspective の中で理解するようにしたい。Practicality の信奉者と academism の擁護者とか、対立し合うことなく、相互補完的に協力することができるならば、学校英語が実用英語として立派に通用し、実用英語も academism に洗練されて、より美しく、人間の心を運ぶ言語として発展するのではないか。Practical English は日本的発想と言ったが、このような意味で発展することが最も望ましいと考える。この考え方は実業界と学界とが相互に門戸を開いて、人的交流を行なう open university に発展する夢につながるものである。真の practicality を支えるものが practical English であって欲しい。Practical であることは、方法論的に高能率なもの、効果的なもの、との側面があり、現在能率主義を推進しすぎ

た結果として、人間不在の高度成長が実現し、能率主義に対する反省が強く打ち出されていることを考え、特に practicality との関連の中で Practical English を見たのである。